

Title	Alfred D・ロー著 『レーニンの規定する民族の自決権』
Sub Title	Alfred D. Low : Lenin on the question of nationality
Author	中澤, 精次郎(Nakazawa, Seijirō)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1960
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.33, No.8 (1960. 8) ,p.62- 68
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19600815-0062

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Alfred D. Low :

Lenin on the Question of Nationality,

New York, 1958, 193 pp.

A・D・ロー著

『レーニンの規定する民族の自決権』

今日、二億八百萬餘の人口（一九五九年一月一五日の國勢調査に關するソ連邦閣僚會議付屬中央統計局の發表による）を數えるに至つたソ連が、實は一七四におよぶ多様な人種・民族・部族（E. S. Immons (ed.), USSR, 1948, p. 14）から成る多民族國家であること、したがつてその意味では帝政ロシアのいわば遺産繼承者であるともい得ること、換言すればボルシェヴィストが社會主義革命の遂行という基本的な課題との關連において民族問題との對決を果したことは一般に熟知されたところであろう。A・D・ローはかかる周知の事實を凝視しつつける。すなわち、オーストリアに生れ、それ故にか、早くから民族問題一般「特に、多民族國家としてあつたオーストリアの民族問題および社會主義的ならびにマルクス主義的な民族理論に興味をいだいていた」（一八頁）彼は、コロンビア大學ロシア研究所の一員としてあつた一九五三年から翌年にかけての

間の研究成果を、「レーニンの規定する民族の自決権」と題する一書として世に問うている。

もつともレーニンの民族理論乃至は政策を對象とした最近の研究書あるいは論文としては、本書が唯一のものではないが、本書にみられる自決のスローガンの意欲的な追求に興味を覚え、またその書評も今のところ他に見受けないので、ここに本書の紹介を思い立つた。なお著者ローの研究歴は本書の序論で示されている以外に詳かでない（一九五九年の第三號の *Russian Review* 誌に著者によら A. G. Meyer : Leninism, Harvard Univ. P., 1957 の書評が記載されている）。以下、本書の概要を記述的に記してみよう。

序論 「民族に關するレーニンの思想は現代的意義をもつか」（一二頁）。かかる問いに著者はまずつぎのように答える。スターリンの死後、特に一九五六年のフルシチョフの秘密演説以後に顯著となつたレーニン主義の再強調、就中あらゆる共產主義者によつて既に示されてきたレーニンの教示の金科玉條的な信奉といつた原則的な事實を考ふるならば、自由世界がなに故にレーニンの思想に通曉しなければならぬかは自明であろうと。しかもこの點は、多民族國家ソ連の現實をレーニンの定立した民族平等の原則との關連における考察を通して、さらに具體的に説かれ、同時にまた著者自身の問題意識がそこに率直に語られている。「新しいソヴェト的植民主義と

帝國主義は、レーニンが絶えず力説した民族の平等と自決の政策と、全く矛盾（一七頁）しており、したがって「民族に關するソヴェトの宣傳は、ソヴェト的な現實とレーニンの提示した政策との對比によつてばかりでなく、民族問題に關する彼の思想のより綿密な分析によつても明るみにさらされるべきで」（一七頁）あつて、彼の思想に内在する數多くの矛盾と不調和特に大ロシア民族的偏見の暴露によつてこそ、被抑壓の諸民族の世界共產主義あるいはソ連による希望と期待とはじめて打破られ得るのであるという。なおまた著者は、本書における考察の對象がレーニンの民族政策乃至は民族理論の全貌ではないことを、すなわち時間的には一九二三年から一九一七年に至るまでの間のレーニンの著作に、いいかえると「民族問題、すなわち支配民族である大ロシア民族と諸他の非ロシア民族との關係を主とした問題に關する彼の著作の分析と評價（九頁）に限定される旨を記している。

第一章 本書の主題を展開するにあたり著者は、まず「ロシアの諸社會主義者がある色のいかんにかかわらずいづれも、階級闘争ばかりか、民族的ならびに宗教的な抑壓にも注目し、そしてなんらかの民族綱領を採擇する」（二二頁）に至らしめた背景的な一般狀況を、比較的詳細に畫きだして、第二章以下の敘述に備える。

第二章 レーニンの關心は民族の概念規定的なあるいは本質論的

な考察ではなく、現状否定的な民族的エネルギーの正確な評量と合目的な處理であつた。しかし民族にたいする彼の姿勢乃至はまた思考を注意深く探ると、そこに一つのアムビーヴァレンスが認められる。彼は、一方では民族ならびに民族國家にたいして冷淡であるばかりか時にはそれを敬視さえするが、他方では民主主義的および社會主義的な見地から被抑壓民族の解放運動を肯定し、民族の自決權を承認した。しからは「恰も赤い一本の糸のように、民族問題に關するレーニンの著作のすみずみまで貫ぬいている」（三一頁）かかる矛盾と不調和は、いかにして合理化されているか。それを知るには、民族運動にたいする彼の基本的な認識が理解されていなければならぬ。著者はかく考えて本章の後半を、レーニンによる民族運動の史的把握の紹介に、換言すると、民族運動の觀點から資本主義的發展過程に二つの段階を認め、資本主義の本來的な國家形態を民族國家に求めるとともに、ブルジョア民主主義革命を経験していない後進的な多民族國家における民族運動の必然性を確認し、また民族問題の根源的な解決・民族的平和の完全な實現の可能性を社會主義社會に見出すレーニンの民族理論の要旨紹介にあてている。

第三章 「プロレタリア革命以前の民族政策」と題した第三章の冒頭で、著者は、レーニンが民族の政治的自決・國家的分離と同義語的に規定している民族自決の概念こそ、「彼の民族政策の背骨」（三

六頁)であるが、この概念の外見的な單純さ・素朴さに決して惑わされてはならぬと警告する。ついで、レーニンのいう民族自決は、「澤山の小函をもつ」(三七頁)と、別言すれば、「なにがボルシェウイストをして民族自決のスローガンを採らせたのか」、またレーニンは民主主義的且つ社會主義的な要求であることを理由として民族の自決權を肯定するが、民主主義そのものにイデオロギー的な重要性を見出ししているのか、それとも單なる宣傳上の乃至は戰術的な意義からのみ自決を肯定したに過ぎぬのか等々の問題を提起すると指摘し、かかる小函の内實を明かにすべく著者は、レーニンの民族理論の本質的な問題に迫り、「政治的民主主義の、いいかえると民族自決を含む民主主義的な諸要求の宣傳がいずれも戰術的ならばにイデオロギー的な理由に、しかも基本的には戰術的な理由にもとづく必然とみなされている」(四二頁)ことを、レーニンの著述にみられる自決の歴史的必然性についての所説・社會民主黨左派ならばに右派にたいする批判・プロレタリアートによる自決權承認の根據・ブルジョア民族主義の全面的否定と民族同化の認識および大國主義的な主張の分析を通して文獻的に實證する。すなわち、「プロレタリア革命以前の民族政策」としてレーニンの提示したスローガン「民族自決の底意は、主として戰術的なものであつた」(七八頁)と、著者はみる。

第四章 プロレタリア革命の同盟者獲得のため、すなわち革命の遂行をより容易且つ急速ならしめるために自決のスローガン採擇が要求されたのであるという理解を前章で得た著者は、改めて、鬪うプロレタリアートと被抑壓民族との同盟の客觀的可能性に關するレーニンの説明にしばらく耳を傾けた後に、つぎのような疑問の數々が生れること、たとえば「レーニンは、民族の自決がプロレタリア國家の乃至は社會主義の諸段階における民族問題を解決できると眞に確信していたのか」(八三四頁)、「プロレタリア革命、プロレタリア國家ならばに社會主義の諸段階における民族の國家的分離を、邊境民族のプロレタリアートならばに人民大衆の利益という見地から望ましいものと考えていたのか」(八四頁)、あるいはまた「自決の權利は民族の恒久的な權利とされてきたか」(八四頁)等々の問題を指摘して、讀者の注視を求める。そして著者は、レーニンが決してあからさまに提示したことのない前記のような核心的な問題點を解明するために、民族の自決とは被抑壓民族の社會民主主義者にとつては結合の自由を、抑壓民族の社會民主主義者にとつては分離の自由を意味すると規定する彼の一見背反的な解釋論にふれ、彼の強い大國主義的な要求を再び取上げ、ついで、「自決の履行という重大な問題についての彼の所説が曖昧であり、つかみどころがなく、また矛盾に満ちたものである」(九八頁)ことを、たとえば社會主義

社會における民族的抑壓必滅の豫測・自決權の非恒久化・權利主體の邊境少數民族への限定といった問題點への考察を試みて明かにする。そして自決に關するレーニンのな諸規定の曖昧さは、實は、彼の抜目のない戰術的配慮の必然であり、好んで反對者を恥しらずの日和見主義者と非難する彼自身が他ならぬ日和見主義を「政策の次元」(一〇五頁)にまで高めているという理解を、著者は、さらに連邦制と民族の問題に關するレーニンの思考の追跡によつて檢證し、「プロレタリア革命の間の民族政策」として誇示された自決のスローガンもまた他ならぬ戰術的な要請に支えられたものであつたと確認する。

第五章 前二章でプロレタリア革命以前および革命の間の民族問題に關するレーニンの所説を檢討した著者は、殘された革命後のそれをこの章で取上げる。まず、レーニンによると、資本主義特にその最高段階である帝國主義には、民族間の不和・對立と民族相互の交流・融合の助長といった「相反する二つの流れ」(一二頁)が同時的に存在し、前者の否定と後者の促進は社會主義の下においてのみ完全に可能となるが、長期にわたつて累積された民族的な憎惡と偏見はプロレタリアによる權力獲得後もなおしばらく殘存しようから、プロレタリア黨は革命後においても民族の自決を一環とする完全な民主主義の實現に主體的な努力を拂わねばならぬが、民族の同

化は疑いもなく歴史的必然であり、特にそれは社會主義社會において顯著に進行すると説かれていと敘述する。ついで、著者はこの民族同化説に注視し、これを古典的なマルクス主義との關連においてさらに追求してつぎのように斷定する。すなわちマルクス主義者にとつては「レーニンが、民族の同化をプロレタリア革命以前および以後の諸段階において必然的に作用する過程と認め、しかもかかる過程に喜びを示していることは理解できないところである」(一一八頁)と。

第六章 著者は、レーニンの提示した自決のスローガンを核心とする民族政策を段階的に整理して、いいかえるとプロレタリア革命以前とその間ならびに革命以後のそれぞれを獨立の章で取上げ且つ檢討してきたが、その成果を、「結論」という章題を付したこの第六章でつぎのように要約する。すなわち、レーニンの規定する「民族の自決權というスローガンは、それが無條件的なものであるならば、プロレタリアートならびに黨の民族主義にたいする重大な讓歩を意味する」(一二二頁) ことにもなるが、事實は戰術的に要求された讓歩に止まり、したがつて戰術的にのみ正當化された嚴しい制約、たとえば自決の權利主體の特定民族への限定・自決權承認の原則性あるいは非實踐性等にみられるような制約を課せられており、また少からぬ曖昧さと不徹底さあるいは矛盾と不調和を内在させて

いる。しかも「戰術的な要求以外の觀點からみても」(二二六頁)、レーニンの民族理論には數多くの矛盾が發見できる。要するに、レーニンの定立する自決のスローガンに見出される諸々の曖昧さと矛盾は、民族主義をブルジョア的・過渡的な現象とする把握あるいは民族の同化を必然とみる認識に示されているように、民族または民族國家にたいして理論的には消極的乃至否定的な態度をとりながら、現實的には自決のスローガンに戰術的な緊急不可避性を認め、このスローガンをプロレタリア黨の民族綱領とするといった彼の又状态的・二元的な思考そのものの歸結であると、著者はとらえている。

第七章 序論と七章から成る本書の第七章「二月革命以後の自決に關するレーニンおよび共産黨の理論と實踐」では、著者は、二月革命ならびに一〇月革命後のボルシェヴィストの民族政策を具體的に跡づけ、ついで大ロシア民族の排外主義にたいする不満と抵抗が黨のジョルジア中央委員會の總辭職となつて現われたいわゆるジョルジア事件の際に示されたレーニンの見解を検討し、「彼の最後の重要な發言であり、民族問題に關する彼の政治的遺言書である一九二二年の書簡においてすら」(一三九頁)、依然として彼が本質的には戰術的考慮からのみ民族問題を處理していること、すなわち民族問題に關するレーニンの思想乃至は理論が、革命という狀況の決定

的な變質にもかかわらず、原理的には終始一貫していることを強調する。

以上、本書の概要を記してみた。その紹介にあつてはできるだけ批判的な表現を避けた。批判されるべき點が本書には見出されないうのではない。まず差當つては、著者がその序論において多辯でありすぎたともいふべき點を取上げたい。そもそも序論とはいかなる内容をもつて充たされるべきものであるかは問わぬにしても、彼が問題の所在の明示と視角の設定を目的として敘述した序論は、レーニンの民族理論の本質あるいはその基本的内容への言及を含むはなはだ多岐な方向に、しかも早い速度をもつていわば飛躍的に展開されており、そのためか、論旨の追跡、特にレーニンの定立した民族理論乃至は政策とソヴエト的現實との關連についての説明の消化は、讀者にとつて決して容易ではない。少からぬ疑問が残される。しかも論旨理解の困難さは遺憾ながら本論においてもしばしば認められる。すなわち、レーニンの民族政策したがつて理論を考究するにあたり「著者は、人類の經濟的・社會的ならびに政治的な發展の原理的な諸段階に關するマルクス主義的概念にしたがつて素材を整理することが、最善である」(一一頁)と考えた。いいかえると一九一三年から革命に至るまでの著作にみられる彼の定立した民族理論乃至は想定した民族政策を、プロレタリア革命以前およびそ

の間ならびに革命以後の三段階に分けて整理し、それぞれ獨立の章を設けて記述する。したがつて敘述の部分的な重複はある程度止むを得ないとしても、著者の場合かかる重複がしばしば論理の停滞となり、しかもそれが發表技術上の配慮の不足とあいまつて文脈をいならずらに混亂させていることは争へない。

成程著者は、本書の紹介で明かなように、プロレタリア黨の民族綱領としてレーニンが提示した民族自決のスローガンの戰術性を文獻的に實證する。しかし民族問題にたいするレーニンの姿勢がすぐれた政治戰術家のそれであつたとする理解は、必ずしも著者獨自のものではなく、むしろ一般的ですらあるといつても過言ではない。

しからは本書の見るべきところは何處か。それは、著者が敘述の過程においてつぎのような諸點を提示あるいは言及しているところにあろうかと考へる。たとえば、自決を政治的な分離としてのみ解するレーニンの主張は第二インタナショナルの規定する自決の忠實な解釋ではないという理解(三七頁)、マルクス主義は民族の同化を必然とみる彼の認識とかかる必然性によせる彼の期待に決して與みしないとする見解(一一五—一八頁)は、彼の民族理論をマルクス主義的な理論との關連において、いわば系譜的に把握しようとする際に究明されるべき問題の所在を自ら明かにしており、またレーニンの民族概念の推測(二九頁)、ジョルジア事件に關するレーニンの

所説とスターリンのそれとの對比の試み(一三四—一九頁)、あるいはレーニンの民族理論そのものを對象とした多角的な批判(たとえば一二六、一三七頁)は、ボルシェヴィズムの民族理論を理解する上に、あるいはレーニン理論を民族の理論一般として取上げる場合に考慮されるべきすぐれた助言ともなるうかと考へられるからである。勿論著者は、レーニンの民族理論そのものの本質を探る上に貴重な指針も幾つか用意している。たとえば民族自決權の承認にとともに危険性にたいするレーニンの自覺への注視(五一、六三—四、一二三頁)、あるいは彼が民族問題の解決を眞面目に考へていたか否か(八三—四頁)といった設問等がそれである。しかし本書においては、それらが主題追求の指針乃至はまた座標として必ずしも充分に生かされていない嫌いがある。既述したように、そこには敘述の交叉と錯綜がしばしばみられ、時には著者の意欲的な問題追求が中途にして終つてゐる。

要するに著者は、レーニンが誇示した自決のスローガンの戰術性を露呈することに急なあまり、このスローガンの合目的性の裏付けに用意されていた彼の民族理論を輕視しているといつて差支えなからう。成程、自決のスローガンが戰術的な要請に支えられたものであることは、民族問題に關するレーニンの初期の著作、たとえば民族の自決とはプロレタリアートの自決を意味すると強調している一

九〇三年二月の論文、「アルメニア社會民主主義者の宣言について」からもうかがえるように、否定できぬところである。しかし、かかる戰術性の論證を、自決のスローガンの意味的な曖昧さ、あるいは羊頭狗肉の内容の暴露にのみ頼ることは、必要ではあるにしても充分とはいえないいわば消極的な手法ではなからうか。問題は、單純に矛盾あるいは不調和として把握する著者の思考の性急さ乃至は安易さにある。たとえば、著者は、レーニンの大國主義に左袒する所説・民族の同化を必然とする認識が彼の定立する自決のスローガンと矛盾するとみる。しかしレーニンにおいては、プロレタリアートによる自決のスローガンの提示が、大國の經濟的優越性あるいはまた民族同化の必然性の認識を前提として許容されていたのではなかつたか。すなわちレーニンの民族理論がプロレタリア黨による民族問題の戰術的な處理の、いいかえると民族自決の戰術的スローガン化の保證を與えていることを見逃してはならぬのであり、自決のスローガンの戰術性が彼の民族理論との關連において統一的に把握されていないところに、本書が隔靴搔痒の感を與える決定的な原因がひそんでいると考へる。

(中澤精次郎)